

れど“That's OK!”と笑ったのです。夫や私がつたない英語で話す間、マイルズは一度も嫌な顔をせず、辛抱強く丁寧に話を聞き取り、ナンシーは陽気にジョークで答えながら、心温まる持てなしをしてくれました。

渡米したばかりで不安だらけの状況でしたが、日本ではないアメリカでの生活をしていかなければなりません。子どもを育て、夫を安心させて学校へ送り出すためにも、一日でも早く、私自身がこの外国での生活に慣れなければと、必死でした。困った時の長女や私は、よくこの“That's OK!”という魔法の言葉を口にしました。彼女たちのやり方を「手本にして解決していけばいいのだ」と、まず気を楽に持つようにしたのです。

渡米当初は、夫が大学へ行ってしまうと、英語がハンディとなって、私は長女と2人で取り残されたような毎日を過ごしていました。彼女らと知り合えた後は、何かあれば他にも「戸を開けてくれる相手がいる」という、望んでもなかなか得られない、恵まれた環境の中にありました。そのことが私の心の支えとなり、少しは近所付き合いが出来るきっかけともなりました。

自分から始めた最初のお付き合いは、ベビーシッターをした事でした。向かいに住んでいたカップルから、生まれたばかりの男の子、トリステンを預かった、その翌日の事です。母親のセーラが家を訪ねてきて、「今まで、どうしてうちの子が、お尻や背中、果てはベッドまで汚すのか分からなかったけど、康子のオシメのあて方を見て、原因が分かった。」と話し始めました。彼女の両親からは、育児の手助けやアドバイスを受けなかったらしく、自分なりの方法で子育てをしていた結果、オシメを背中側に閉じていました。私にとっても長女が初めての子どもですから、オシメのあて方が、「アメリカと日本では違うのかな？」と思いながらも、取りあえずお腹側に閉じ直して、子どもを返したのです。私のやり方が正しいかどうか、翌日まで実験してみたというのは、驚きでした。また、わざわざその結果を知らせに来たのです。

それ以後、私の英語はまったく頼りなく、たいていは身振り手振りを利用し、手本を見せるばかりでしたが、彼女に育児のアドバイスをする羽目となりました。話せば話すほど気持ち落ち込んでいくのですが、相手は、「私は外国人で言葉ができなくて当たり前」という対応でした。そのため、自信を失う必要はなく、「言葉の問題」と受け止めるよう、自分自身に言い聞かせたものです。

よく考えてみると、私の周りは、私に限らず、留学生を含め、家族を抱えて学業を続けるアメリカ人ばかりで、お互いに助けが必要な人だらけでした。英語が流暢に話せなくても、

ちょっとした行動で、私にも手助け出来る事が一杯ありました。夫が私によく言う、「やるかやらないか」だけの事だったようです。時には、親切のつもりで「それ、やりましようか？」と申し出ても、断られる事はあります。そんな時は、「必要な時はいつでも言ってね。」で終わってしまうことが、度々です。

この30年間に、「助けたり助けられたり」や「トラブルとの遭遇」は、書ききれないくらい経験しました。それらの一つ一つを体験するごとに、マイルズとナンシーが示してくれた「大きさに感じない」、また、私の力で「解決出来ない事はそれほど多くない」と言い聞かせる事で、この外国に馴染んできました。

少しでも気を楽にして生活できるように、自分を取巻く環境の中から、様々なことを「まねて」学んできました。それでもまだ、アメリカは外国だという感覚が抜けません。

(次号へつづく)

ナンシーとマイルズにUCLAの家族寮で出会ってから、四半世紀以上（我が家の子ども達の大好きな表現！）になります。彼女と一緒に記憶を手繰り寄せてみると、隣同士として住んでいたのは、わずか1年ほどの事だったというのですから、驚きです。夜中近い時間に、「I need your help!（開けゴマ!）」と「扉」を叩いたのが、家族ぐるみの交際をするきっかけとなりました。何度もこの話を語って聞かせる私に、「ナンシー達のようないい友人を得られた事自体、お母さん達はとてもラッキーだったのよ。」と長女は言います。

最近では、成人して忙しい子ども達もふくめ、年に一度会うのが精一杯です。今年は新年早々から家族揃って集いました。「今年こそ、子ども達だけで日本旅行を！」と、氣勢を上げる母親達をよそに、子ども達同士で連絡を取り合う約束をして別れたようです。

松本 康子（まつもと やすこ）

1979年、夫の留学で、1歳半の長女を帯同し渡米。その後、アメリカで次女、三女を出産。専業主婦として子育てと教育を担当。

子ども達は、親から見てもうらやましいバイリンガル・バイカルチャーの大人に育ちました。しかし、「アメリカで日本人の子どもをバイリンガルに育てた」私が、実は、子どもに育てられていたのです。このコラムでは、「海外でともに育った母と子」の悪戦苦闘の姿を紹介させていただきます。皆さんの海外での子育ての参考になりますでしょうか？



渡米直後の不安な生活を、アメリカ人の友人達と助け合いながらスタートしサバイブした康子さんの成長の記録です。

マイルズもセーラもUCLAの学生でした。生まれも育ちも全く違う世界から集まった人たちが、学生の家族という共通項だけで結ばれて、貧しくとも有意義な生活を送ったのです。

その生活と友人関係を通して、「母と子は共に育った」のです。